

## 食品安全委員会委員と消費者団体との情報交換会（第2回）

1. 日時 : 平成25年2月22日（金） 10:30～12:30
2. 場所 : 食品安全委員会 委員長室
3. 出席者 : (敬称略)

(消費者団体)

主婦連合会 副会長	有田 芳子
全国消費者団体連絡会 事務局長	河野 康子
全国地域婦人団体連絡協議会 事務局次長	長田 三紀
日本生活協同組合連合会 組合員活動部	片野 緑

(食品安全委員会委員)

熊谷委員長、佐藤委員、山添委員、三森委員、上安平委員

(食品安全委員会事務局)

姫田事務局長、本郷次長、磯部評価課長、北池勧告広報課長、  
篠原リスクコミュニケーション官 他

### 4. 議 事

- (1) 委員長挨拶
- (2) 出席者紹介
- (3) 「食品安全委員会の活動状況」
- (4) 「農薬を考えてみよう」
- (5) 質疑応答、意見交換会

### 5. 意見交換の主な発言（○：消費者団体側発言 ●：委員及び事務局側発言）

○：今回は食品中に含まれる農薬の話であったが、農作業従事者の作業中曝露に対する基準の決め方も同じか。

●：農林水産省管轄の話であるが、農作業従事者の作業時安全基準というものが既にある。また、急性中毒に関しては急性参照用量という考え方がある。米国などでは急性参照用量を設定して早くから動き出しており、食品安全委員会としても近い将来設定に向けた検討を行う予定。

○：厚生労働省が定めている大豆用の除草剤の残留基準値（MRL）が高い気がするが、食品安全委員会としてはどう考えているか。

●：作物が違えば当然異なる MRL が設定される。トータルで ADI を超えなければ問題ない。

また、農作業者の安全については農家の自己責任。使用基準を遵守してもらうことが重要。

最近は危ない農薬は減少している。

- ： 本日の説明で今の農薬が安全であり、たくさんのお金と時間をかけて安全に対する様々な取組を行っていることがわかった。このようなものを学校で教える機会があればいいと思う。  
また、最新の科学の進歩のようなものを連続講座などで教えていただければと思う。科学の進歩をどう判断すべきかを伝えるのは食品安全委員会の取り組みではないか。
- ： 連続講座の先には、中学・高校への教材提供ができればとこれまで考えていた。連続講座の資料を改善しながら検討していきたい。
- ： 食の安全の分野はとても大切で小さい時からのリスクミ計画が必要だと思う。
- ： 連続講座で使用した資料や説明ぶりの動画のHP掲載なども考えている。  
また、現在の食育が地産地消やファームステイに特化されているが、食品安全に関するリスクミと食品の安全教育というのはオーバーラップしている部分も多く、食育としての取組に力を入れていこうと考えている。
- ： 事務局として地方へ出向いて研修することが多いが、地方の人は家を離れて研修の場に出ることそのものが難しい現状。現場に近いところでの「場」の設定と人と人が生で話し合うリスクミが大切だと感じた。教材と併せてぜひ行ってほしい。
- ： 面と向かって説明していると誤解しているポイントなどいろいろとわかる。直接コミュニケーションを取りながらできれば一番良い。
- ： 自ら地方で「場」を設定してリスクミを行うことについては予算とマンパワーの問題があり限界がある。「場」を設定し、呼んでいただければスタッフを派遣することはできる。
- ： 運営計画についてはリスクミを今後、積極的にやっっていこうとしているのだと感じた。  
農薬については、動物実験の実例などでイメージがわいてよかった。全国の組合員と話していても農薬については過去のイメージによる不安と、管理がしっかりなされていないのではとの不安がある。管理機関と一体となったリスクミが必要だと思う。  
また、食品安全委員会で食品安全に関する副読本を作っているが、自分の子供の話を聞く限り実際の教育現場まではまだ浸透していないように感じた。
- ： 食品安全委員会ではキッズボックスの開設や中学校でのジュニア食品安全

ゼミナールなどの取組を行っている。教育分野は様々な関係者が関わっておりなかなか難しいが努力していきたい。

また、本日は食品安全委員会との情報交換会であるため、リスク評価が中心であるが、リスコミは基本的には関係省庁共催にて実施している。

- ： 食品安全に関する勉強会の構成についての問い合わせが良くある。何かベースとなるセットメニューのようなものは考えられないのか。
- ： これまでの意見交換会等についてはHPに資料や議事録等を公開している。参考にさせていただければと思う。
- ： 放射性物質などについても、概ねひととおりに聞いた人たちが、少し踏み込んだ（新鮮な）ものを聞きたいという要望がある。
- ： 放射性物質など日常で馴染みのない分野については専門用語などの理解が難しい。非日常の言葉をどのくらい消費者に近づけられるかが大切。
- ： これは非常に頭の痛い問題。どうしても専門用語を使わざるを得ない場合もあるが、丁寧に説明していると非常に時間がかかってしまう。
- ： ターゲットを見極めた説明内容の検討が必要である。
- ： 農薬については、農薬が果たしている役割を良く知らないために、過度に農薬を拒否している例もあると思う。
- ： プレゼンでDDTについて触れられた。DDTはマラリアの蔓延を防ぐために海外では使われているところもある。このように、日本では禁止されているのに海外では禁止されていない農薬について、その事情等の説明があればよかったと思う。その場で疑問が解消されなければ不安になるし、だまされた印象を持つのではないか。疑問は全て出してもらえよう意見交換会が必要。
- ： 農薬や食品添加物などそれぞれの物質についての話はできても、人体のしくみなど全てに関わってくるバックグラウンドを相手方がどの程度わかっているかで説明ぶりが変わってくる。相手方の理解度はなかなかわからないので難しいところ。高校卒業までに生きていけるための最低限の科学について学んでおいてもらえればいいのだが。
- ： 学研やベネッセなどの教材に売り込んでみてはどうか。興味を持ってもらえれば食品安全委員会のHPも見てもらえるのではないか。
- ： 消費者は1つ1つのリスクのみを見てしまう傾向がある。相対的に判断す

ることができる人は多くない。

- ：例えば農薬の場合でも、本当は選択的に毒性を発現する薬剤に変わっていることなど、農薬の開発の歴史も深化していることを前提にしたいが、バックグラウンドの説明をするととても時間がかかってしまう。現在は科学の進歩でしっかりとしたリスク評価をできるようになった。昔は何を調べたらいいかもわかっていなかった。
- ：フードチェーン全体の流れの中での農薬のメリットに関する説明があればイメージしやすいのではないかと思う。トータルで農薬をどう使ってどう食べるかの中で理解できればよい。そういう意味でも食育との連携と工夫が必要だと思う。
- ：体験農園というものが多くあるが、その参加者等への教材であればわかりやすいのではないか。
- ：生産者も含めて消費者へいろいろな情報を伝えていかなければならないと思う。

(以 上)